科目別対策講座・現代文

【一】　”客観的に読む”ために

【２】過去問演習・解説

”客観的に読む“ために

■日本語の文法に従って読む

(1)”文構造“を意識する

①”主語↓述語“や”修飾語↓被修飾語“の関係

例　受験が近づいているので、僕は日本語の文法に従って客観的に本文を読むための訓練をする。

②”助詞“への意識を高めよう

例　国語は、得意科目である。

国語も、得意科目である。

”客観的に読む“ために

⑵ ”指示語“ の処理は確実に

①指示語が含まれる「一文の構造」をとらえる
（＝指示語の「直後」にある「ヒント」をつかむ）

②指示語の「直前」に「指示語が指す内容」を求める

③指示語に指示内容を代入して確認する

【〇〇〇】

【指示語】……。

”客観的に読む“ ために

⑶さまざまな表現

①敷衍表現　筆者の主張をまとめたり、言い換えたり、その例を示したりすることで、主張を強調する。

- **要約**　つまり／すなわち／要するに／このように
- **定義**　AとはB／AということはB／AはBを意味する
- **換言**　言い換えれば／いわば
- **列挙**　第一にA、第二にB／まずA、次にB
- **類似**　AもBも／AとBはCという点で似ている
- **変化**　A↓B

②差異表現　筆者の主張を相異なるものと比較し、その差を明らかにすることで、主張を強調する。

- **否定**　AではなくB／AだけでなくB／AよりむしろB
- **逆接**　AだがB／AけれどもB／AしかしB
- **譲歩**　たしかにA／むろんA／もちろんA／なるほどA

※いずれも逆接を伴うことが多い

③修辞表現　言葉の言い回し、表現の工夫によって、その箇所が主張であることを示す。

- **強調性**　実は／特に／AこそB／最も／～べき
- **重要性**　重要／注目／問題／特徴／必要／～なければならない
- **本質性**　本質／基本／基礎／核心／前提／背景
- **主観性**　～と思う／～と思われる／～と感じる
- **疑問**　なぜAか。Bから。
- **反語**　～ではないだろうか／～ではないか／～ではなかろうか

”客観的に読む“ために

■知識を増やそう

(1)漢字

①「手で書いて覚える」必要はあるのか？

例　ライバルにイッシ報いる。

（　　）

例　彼はヘイゼイから努力を怠らない。

（　　）

例　剣術の心得をシナンする。

（　　）

知っている漢字の組み合わせで書けるものは、

「目」で覚えればいい。

”客観的に読む“ ために

(1)漢字
②難しい漢字はどう覚える？

傲・癒・騰・寡

■その1　パーツを観察する
①その漢字を30秒見る　↓　漢字のパーツを観察する
②目を閉じてその漢字を思い浮かべる
③何も見ずにその漢字を書いてみる
④正しく書けたら、確認のために5回書いてみる

■その2　熟語　↓　訓読みに分解してみよう

■その3　意味までしっかり覚えよう

■その4　例文のなかで覚えよう

”客観的に読む“ために

⑵評論用語や慣用表現

例題　次の①～④のことばの意味を答えなさい。（制限時間　２分）

①　絶対

②　理性

③　レッテルを貼る

④　役不足

”客観的に読む“ために

⑵評論用語や慣用表現

① 絶対
＝他のものから独立して、それ自体で存在したり、それ自体で意味や価値を持ったりすること。
【対】相対

② 理性
＝物事を、論理的・合理的に考えたり判断したりする能力（精神の働き）。
【対】感性

③ レッテルを貼る
＝ある人物に対して、断定的な評価を与える。
【類】烙印を押す

④ 役不足
＝その人の力量からすれば、役割が軽すぎること。
※「能力不足」という意味ではない。

”客観的に読む“ために

⑶背景やテーマに関する知識

例題　【近代】とは？

古代　自然に隷属的で抵抗できなかった

↓

中世　人間を超越した存在（神）を世界の中心に

・ルネッサンス
・産業革命
・市民革命

↓

近代　人間中心に

英語も現代文も古文も【言語】の科目なので、
（正しい）語彙力が最終的な差となります。
知らないことばは当然ですが、
「見たことはあるけれど意味が正確に言えない」などの
「知っていると思い込んでいることば」に対しても、
一つ一つ丁寧に、正しい意味を調べていきましょう。

”客観的に読む“ために

■筆者の思考（論理）をつかもう

(1)「論」と「例」

「論」＝筆者の意見・考え（抽象的）

「例」＝「論」をサポートする箇所（具体例・比喩・引用）

【論】……。……。……。

【例】～～～～～。～～～～～。～～～～～。

【論】……。……。……。

①通読の時に「例」を（　）で閉じて、
その前後にある「論」をチェックする。

②「論」↓「例」↓「論」の展開になっている時は、
「論」同士の対応に注目する。

”客観的に読む“ために

■筆者の思考（論理）をつかもう

(2)「対比」

【A】……。（a_1、a_2）

【B】～～～～～。（b_1、b_2）

①比較されるもの（AとB）と相違点（aとb）を確認する

②a_1が問われた場合、b_1と比べて考える。

(3)「並立・添加」

「並立」＝「並べる関係」のこと

「添加」＝「付け加える関係」のこと

「並立」

【A】
また・同時に
ながら・と
【B】

「添加」

【A】
＋ しかも・そのうえ
さらに
【B】

”客観的に読む“ために

■筆者の思考（論理）をつかもう

(4)「類似」

【A】……。

＝．どのような点で似ているのかを確認する

【B】～～～～～。

「も」による並立関係

①何かと何かを並べる（「も」の直前を見る）

②両者に共通要素・類似性がある

(5)「限定条件」

「……とき、
……場合、
……ば、
……かぎり、
……以上、」

～～～～～。

※内容説明・理由説明を問わず、限定条件を踏まえる

※論理の飛躍を埋めて解答を考える

”客観的に読む“ために

■筆者の思考（論理）をつかもう

(6)「因果関係」

【原因】 ←― 【結果】

だから・したがって・ので・によって

※選択肢中に因果関係があった場合は、
本文中にその因果関係があるかを確認する。

(7)「矛盾」と「逆説」

「矛盾」

【A】 ←→ 【B】

A・Bどちらか
もしくは両方「偽」

「逆説」
＝実際に成立する矛盾

【A】 ←→ 【B】

A・Bどちらも「真」

「逆説」は2パターン

①「並立的逆説」

②「因果的逆説」

問題演習での心得

(1)時間配分を意識する

▼漠然と大問ごとの時間を守るのではなく、
「読む時間」と「解く時間」を分けて計る。

(2)問題数を確認する

▼問題を解き始める前に、設問のラインナップを確認する。
※選択肢は見なくてよい（むしろ見ない方がよい）

(3)マーキングしながら読み進める

▼論理的文章の場合は「筆者の強調している箇所」、
文学的文章の場合は「心情に関わる表現など」の、
重要箇所に線を引きながら読み進めていく。

(4)設問を解くための下準備

▼傍線部・空欄を含む一文の構造チェックをする。
※設問パターンを問わない
▼「主語ー述語」などの文構造を押さえたら、
「指示語・接続語・キーワード」などがあるかを確認する。
▼設問条件に合う解答ポイントを探す。

(5)「あるもの探し」で解いていく

▼いわゆる消去法ではなく、
本文からキーワードや構文などの解答のポイントを
少しでも拾い、それが「あるもの」に絞っていく。
▼絞った後に消去法を用いることはあるが、
最初から消去法で解いていくと、時間がかかる。

〔一〕左の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（制限時間２０分）

思えば、われわれのまわりには、自分では検証できない専門知に依存するものがたくさんある。自分で検証できないものをすべて疑い始めたら、現代においては、①ほとんど生活が成り立たなくなるほどである。自分の服用している薬が安全であるかどうか、いま通行しているトンネルの天井が突然崩落することはないか、乗っている電車が脱線することはないか、等々、疑う余地はいくらでもある。いずれも、自分一人では検証できないか、できたとしても相当の努力と時間と費用を要することばかりである。

さまざまなタイプの「専門知」は、それ自体としてみれば、高度に整備され、多くの人によって検証された信頼できる理論や方法論を備えているだろう。しかし、トウ(ア)ガイの学問知や技術知がどんなに信頼できるものであっても、それにもとづいて語られたことを、すべての人が自分で検証できるわけではない。となると、トウガイの②「専門知」の信頼性は、社会的には、どうしても「人」の信頼性に依存することになる。どんなに優秀な専門家であっても、嘘をつくことはできるからだ。

疑おうと思えば疑うことができたにもかかわらず、これまで疑わずに生きてきた専門知が、ある日突然疑わしくなってしまったとき、（中略）専門家集団への信頼が揺らぐ。そうなると、疑いはどこまでも膨らむ。同じ専門家集団が、いくら新しいデータを出してきても、すべてが偽装や隠蔽として疑われうるから、問題の解決にはならない。当の専門知がどんなに精密さや正確さを備えていても、ほとんどの人はそれを検証することができないから、不正確な発言と区別がつかなくなる。当の専門知の正確さとは別の次元で、疑いがどんどん昂進するようなモードに人は入り込んでしまう。

ここで問題が根を下ろしている次元は、コン㋑テイ的には、科学的研究の確実性という次元を突き抜けてしまっており、もっと㋒ホウカツ的な、人間同士の社会的連関の次元であることが炙り出されてくる。社会において、専門家集団がどのように信頼を勝ち得ているか、そしてまた、どのようなときそれは信頼を失うか、が問題となっているのである。

あるいは、次のような方向に問いを進めることもできる。ある専門家集団が信頼を失ってしまったとする。人はそれに憤ったりあきれたりし、科学そのものに対する不信感さえ口にするかもしれない。そこで興奮して足を踏み外し、手首を骨折してしまったらどうするか。慌てて病院に駆け込み、現代科学の粋を集めた検査機械の前に座り、現代医学にもとづく医師の治療を受けることに、何の疑問も抱かないのではないか。科学は疑わしくなったので、まじない師のもとに駆け込む、という人はまずいないだろう。

とすると、われわれは、たとえ科学に対して不信感を抱いたとしても、行動のレベル、生活のレベルでは、依然としてそれへの信頼をもちつづけているのである。それは、私が当の医学的治療の（　Ａ　）や、検査機械の（　Ｂ　）を厳密に検証したからではない。一つの専門家集団を疑わしいと思うのと同じレベルで、あるいは、それよりもっと深いレベルで、われわれは、検証し確かめることなく、科学の「確かさ」を信頼しているのである。ここで問題にしようとしているのは、そのような信頼がどのようなところに根を下ろしているのか、ということである。

（中略）

ある専門家集団を信頼できるかどうか、という問題は、科学に特有の構造的問題にも関わっているが、ここでその問題に踏み込むことはできない。ここではむしろ、専門家集団も人間の集団である、という点に着目しよう。この点に限って言えば、専門家集団に対する信頼は、その他の人間集団に対する信頼と本質的には変わらない。われわれは、さまざまな人間や人間の集団について、その信頼性をたえず評価し、吟味しながら生きている。この友人は信頼できるかどうか、この会社は取引先として信頼できるかどうか、この銀行は信頼できるかどうか、この国の代表団は信頼できるかどうか、この時代にこの地域を探検した人々の報告は信頼できるかどうか、等々。

その場合、広い意味での「他人の評判」は有力な手がかりになる。この会社は、これだけ多くの会社と取引をしているのだから、信頼できるだろう。この探検家の報告は、これだけ多くの研究書に引用されているのだから、信頼できるのだろう、といった具合である。③こうした「他人の評判」は、最終的には、直接触れあう身近な他人にまで行き着く。ある会社の信頼性を支えているさまざまな取引先のなかには、自分の会社のよく知っている取引先も含まれているかもしれない。少なくとも、いくつか繋がりをたどれば、どこかで自分の直接知っている範囲に触れあうところが出てくるだろう。ある探検家の報告が信頼できることは、それを引用している無数の文献から推測できるが、それらの文献のなかには、自分の恩師が教えてくれた文献も含まれているかもしれない。そうでなくても、いくつか繋がりをたどれば、そのように自分が直接見聞きした範囲にリンクが及ぶだろう。

（　X　）、ある事柄が「確か」であるかどうかは、無数の人間関係の連鎖に支えられ、それをコンテクストとして成立してたどいるが、その人間関係の連鎖を辿れば、その信頼性の重要な部分は、自分が直接知り合った人々の信頼性に根づいているということがわかる。文献を教えてくれた教師を私が信頼しているのは、どのような教師が信頼できるかを身をもって（ときには反面教師として）教えてくれた数多くの教師たちのおかげだし、それらの教師たちが、私にとって教師としての信頼性を獲得したのは、私の親を含む大人たちの態度や、「教師とはどんな存在か、教師に対してどう振舞うのが適切か」について彼らが教えてくれたことによるかもしれない。養育者やそれに類する人々は、私にとってそもそも他人への信頼の原型を形づくった人々であると言える。そこから出発して、信頼形成のリンクをたどって、われわれは専門家集団の信頼性までを判定し、それに支えられて、その専門家集団の専門知に支えられた事柄を、「確か」であると考えるのである。

専門知の信頼性が人間ないし人間集団の信頼性に依存しているという議論に、とりわけ④科学を職業にしている人たちは、違和感を覚えるかもしれない。人が科学を信頼するのは、それがきちんとステップを踏めば誰でも確かめられるからだ、といいたくなるかもしれない。もちろん、それも科学への信頼のコンテイにあるだろう。一般の人も、そのことは理解している。だがほとんどの人はそれが実際にはできない。

（　Y　）、たとえ何らかの分野の専門家であっても、すべての科学的知識を実際に漏れなく自分で検証するのは、現実的には不可能である。それにもかかわらず、圧倒的多数の人が科学を信頼しているのはなぜか。それが問題なのである。そこには明らかに、⑤反省的な主題的検証によるのではない「確かさ」が顔を出している。そのような非反省的な「確かさ」が、人間関係の多重的なリンクに依存しており、その信頼性の網の目をたどっていくと、直接に見聞きし、語り合い、コウ㊀ショウしている身近な他人とのつきあいが、その信頼性の核にあることが見えてくるのである。

（田口茂『現象学という思考〈自明なもの〉の知へ』による）

（注）コンテクスト＝文脈。周辺的な状況。

問一　傍線部㋐～㋓にあたる漢字を、次の各群から一つずつ選びなさい。

㋐トウガイ（当該）
① 慨　② 該　③ 概　④ 蓋

㋑コンテイ（根底・根柢）
① 定　② 低　③ 底　④ 抵

㋒ホウカツ（包括）
① 法　② 報　③ 包　④ 豊

㋓コウショウ（交渉）
① 承　② 渉　③ 証　④ 称

受験生が間違えやすい漢字は、

①同音異義語

②似たかたちの漢字（部首違いなど）

漢字・語彙の問題は日々の努力が点数に直結するので、

コツコツ頑張って得点源にしよう。

問二　傍線部①「ほとんど生活が成り立たなくなる」とありますが、その理由を説明したものとして明らかに**ふさわしくないもの**を一つ選びなさい。

① もしすべての専門知を自ら検証するとすれば、根拠となるすべての理論を学び、すべてのデータを分析しなければならず、通常の生活を送るための時間が不足するから。

② すべての専門知を疑いはじめると、その専門知に基づいて開発され、社会において提供されている商品や設備、サービス等を安心して利用することができなくなるから。

③ もしすべての専門知に基づく商品や設備等の信頼性を自ら検証するとすれば、膨大な情報を集め、多くの実験設備を確保するために莫大な費用を要することになるから。

④ すべての専門知を人々が検証しはじめた場合、多くの誤りが明るみに出され、その専門知に基づく商品や設備、サービス等を安心して利用することができなくなるから。

■不適切な選択肢を選ぶ時の注意点

本文に書いていない　↓　許容する

＝　明らかに不適切なものを選ぶ

問三　傍線部②「『専門知』の信頼性は、社会的には、どうしても『人』の信頼性に依存することになる」とありますが、これを説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

① 多くの人々は専門知の正しさを自ら検証することができないため、その知を生み出した専門家が嘘をついていないかよく確認することで、その知の信頼性を評価している。

② 多くの人々は専門知の正しさを自ら検証することができないため、各種の世論調査の結果から明らかとなる多数の人の意見を基準として、その知の信頼性を確認している。

③ 多くの人々は専門知の正しさを自ら検証することができないため、信頼できる専門家や身近な人の意見を手がかりにして、その知が信頼に値するかどうかを判断している。

④ 多くの人々は専門知の正しさを自ら検証することができないため、それを「正しい」と言う知り合いの意見を優先することで、その知が信頼に値するものと見なしている。

■適切な選択肢を選ぶ時の注意点

本文に書いていない　↓　不適切と判断する

問四　空欄（　A　）と（　B　）を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

① A 適格性　B 整合性
② A 公正性　B 機能性
③ A 適切性　B 機敏性
④ A 正当性　B 正確性

■空欄補充の解き方

①前後の文脈と矛盾がないように
②文の抽象度を意識する
③筆者の言語のクセに合わせる

問五　傍線部③「こうした『他人の評判』は、最終的には、直接触れあう身近な他人にまで行き着く」とありますが、これを説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

① 「他人の評判」への信頼は、直接知っている人への信頼や、その人が関わっている人や物事への間接的な信頼に始まる信頼の連鎖において生じるため、その大もとは身近な他人との関係にあるといえる。

② 「他人の評判」には自分がよく知っている人に関する評判も含まれており、その人への評価が好意的であれば「他人の評判」も信頼できることになり、その大もとは身近な他人との関係にあるといえる。

③ 「他人の評判」は多くの人たちの評価から生まれるが、評価を行う個々の人は、自分がよく知っている人の下した評価にならって同じ評価をするため、その大もとは身近な他人との関係にあるといえる。

④ 「他人の評判」といわれる、ある対象への世間的な評価とは、自分が直接知っている人を含む、世間の良識ある人々が持つ価値観を反映しているため、その大もとは身近な他人との関係にあるといえる

問六　空欄（　X　）と（　Y　）を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

① X　それと並行して　Y　むしろ
② X　このようにして　Y　さらに
③ X　とはいっても　Y　もちろん
④ X　それゆえに　Y　反対に

■接続語のアプローチ順序

①副詞の呼応
②逆接
③具体例
④その他

問七　傍線部④「科学を職業にしている人たちは、違和感を覚えるかもしれない」とありますが、その理由を説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

① 科学を職業にしている人たちは、専門知の正しさを検証する過程に人間関係を持ち込むと不正が生じることもあるため、人間集団の信頼性に依存することは避けるべきだと主張するであろうから。

② 科学を職業にしている人たちは、どのような専門知も常に自分たち自身で理解し、その正しさを検証している人たちであり、わざわざ人間集団の信頼性に依存する必要がないと考えがちだから。

③ 科学を職業にしている人たちは、ステップを踏むことで誰もが専門知の正しさを検証できると論理的に考えがちであり、正しさの判断が人間集団の信頼性に依存するとは想像もしないだろうから。

④ 科学を職業にしている人たちは、専門知の正しさを一部の人々しか検証できないことが科学の発展を妨げることを知っているため、人間集団の信頼性に依存することは危険だと思うはずだから。

問八　傍線部⑤「反省的な主題的検証」とありますが、これを説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

① ある専門知について主体的にその正しさを検討し、専門家による誤りが発見された場合は、その修正を求めること。

② ある専門知を主体的に理解するようにつとめ、自分の理解が誤っている点を発見した場合は、それを反省すること。

③ ある専門知が正しいことを、論理のすじ道を踏み外すことがないよう絶えず意識しながら、誤りなく証明すること。

④ ある専門知の正しさについて、自分が着実な理解を積み重ねているかを絶えず顧みながら、注意深く確認すること。

問九　この文章の内容に合致するものを一つ選びなさい。

①専門知への疑いがいったん生じると、多くの人はその正否を自らは検証することができないため、疑いの高まりに歯止めをかけることができず、完全に科学を信頼しない状態にまで昂進してゆく。

②　ある探検家の報告は、無数の文献に引用されていることのほか、それらの文献の中に恩師から教わったものがあるなど、身近な人間集団における信頼形成のリンクと結びつくことで信頼を獲得する。

③　ある専門家集団への信頼は、彼らが提供する専門知の確かさだけでなく、彼ら個々人の人柄が信頼に値するかを人々が吟味した結果生まれる点で、他の人間集団への信頼と同じ仕方で形成される。

④　たとえある人が科学への不信感を口にしていても、いざ自分がけがをしたとなれば、まじない師に頼ることはせず、病院に駆け込むことから、その人が心にもないことを言っていたことが分かる。

〔二〕左の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（制限時間２０分）

世界をできるだけ単純な公式に還元しようとする宇宙論や哲学あるいは数学と、キノコにはまだ未知の種類が数千種もあるという、世界の多様性に喜びを見出す博物学と、学問にも両極があることを知ったのは、学生時代であった。下宿の隣の部屋には理論物理学者がいて、個物への興味を持つということそれ自体が理解できないらしかった。彼は少数の本を手元に置いているだけであった。たいていの本は買ってくると、表紙を「重い」と言って捨て、飛石のように数式だけを読んで、二百ページくらいの本を一時間もするとごみ箱に直行させるのであった。もっとも、彼が音楽を好み、少数の文学（中略）を評価していたことを付け加えねばならない。彼が「マラルメはどんな場面でももっとも美しい音を選び、ヴァレリーはその場面にふさわしい音、従って不快な場面では不快な音を使う」と言ったのは、今も至言ではないかと思っている。

二人の共通の知人に生物学者がいて、オサムシの触角にしか生えないカビを研究していた。「へえー、どうしてまたそんなものを？」とからかうと、これほど栄養要求性の厳密な生物は稀だから面白いのだと言い、これが重要な学問分野だという証拠に、もっぱらそのカビについて書かれた部厚い洋書を見せたが、それは①一種の正当化で、彼が世界の多様性そのものに魅せられていることは疑いないところだった。彼の部屋には大部の図鑑類が揃っているのはもちろん、たとえば魚類図鑑には印と感想が書きこまれていた。彼は図鑑の魚を機会あるごとに食べて、味を評価していたのだった。彼が、視覚だけでなく、味覚までを動員して、世界に直接肌で接しようとしていたことは間違いない。

私は二人の友人のうち、前者を「火星人」、後者を「金星人」と呼び、自分をひそかに「地球人」と（厚顔にも）規定していた。当時のＳＦでは、火星は幾何学的な運河と抽象的な建築のひっそりと並ぶ他は風の吹きすさぶ砂漠であり、金星はジャングルの鬱蒼と茂る世界だったからである。

（中略）

バリントという、フェレンツィの弟子の、なかなかユニークで実践的でもある精神分析家がいた。彼は『スリルと退行』という本を書いて、発達論的対象関係論からすれば、最初の母子一体の「調和的渾然体」が破れた時に二つの状態が実現すると指摘したことがある。第一は、安全保障感を距離に依存する「②フィロバティズム」であり、第二は、安全保障感を膚接に依存する「オクノフィリア」である。用語が変なのはバリントだから仕方がない。

土居健郎の「甘え」に即していうなら、「調和的渾然体」が原初的な純粋な「甘え」の状態であり、「フィロバティズム」は「甘えの拒否」、「オクノフィリア」は「甘えの病理的形態」ということになるだろう。

これが成人において実現すれば、フィロバティズムの場合、対象なき空間とおのれの「スキル」とに全幅の信頼を置いて飛躍する「スリルの人」となる。対象はスキルを発揮するための道具にしかすぎず、いくらでも取り替えの利くものである。バリントは、例としてパイロットや曲芸師を挙げているが、数学者、理論物理学者、哲学者も多数派は③フィロバットだと私は思う。実際、彼らの書いた数学や宇宙物理学（の啓蒙書）を読む時に味わう「スリル」は、日常からの超脱のスリルで、飛行のスリルと同じ質のものである。

これに対してオクノフィリアとは、対象なき空間を恐怖し対象にしがみつき膚で接していることを好む臆病な人、独りでおれない人である。

バリントの独創は「フィロバティズム」の概念創出にある。精神分析は従来もっぱら「オクノフィリア」にだけ目を向けていたと言っている。また、バリントの筆致は明らかに「フィロバティズム」に好意的である。しかし、その文章から、バリント自身はどちらかといえば「オクノフィル」、つまり甘えの人でなかったかと思わせるものがある。

わが「火星人」は「フィロバット」的傾向があり、「金星人」は「オクノフィル」的傾向があると言ってよいだろう。もっとも、一般論として「フィロバット」のほうがよいと私は思わない。「フィロバット」も出発し帰還する大地を必要とする。無限に長いロープの綱渡りというものは不可能である。

さて、精神病理の世界にも両方があるように思われる。数学や宇宙物理学（の啓蒙書）を読む時に確かに感じるスリルと同じものを感じさせる精神病理学の論文がある。「自己」や「他者」「世界」という言葉が縦横に使われている論文である。「（　Ａ　）」の成果であろう。私は、これらに畏敬の念を持つが、私自身はたぶんかなりの「（　Ｂ　）」であって（中略）、才能の乏しさとは別に、非常に一般的、抽象的な言明をしようとする時には必ずそっと袖を引いてやめるようにさせる一種の感覚を自分の中に感じる。具体的なものを対象としない時には、確かに、自分の中で引っ込み思案が生じる。

したがって、私は、自分の精神医学の枠組みの全体を明らかにできない。それは、自分にも見通せていない。そういうものが明確にできれば、非常に楽になるのかもしれないし、逆に腑抜けのようになるかもしれない。どちらになるかが分からないから、私には、明確にしようとする努力ができない。私にとって、私の精神医学は、（　Ｃ　）にあるのではなくて、（　Ｄ　）にあるような感覚である。

そのような精神科医は、④（一）何も書かないか、（二）症例報告を書くか、（三）エッセイかアフォリズムを書くか、であろう。

何も書かないのが最高であるといちおうは思う。第一、この言明には「（　Ｘ　）」がある。

かつて詩人ヴァレリーは「なぜ書くか」というアンケートに「弱さによって」と答えたという。彼の書いた散文のほとんどは依頼原稿であった（中略）。もっとも、断り切れない弱さというだけでなくて、書こうとする内部の衝動に安易に負けてしまうという含みがあるだろう。私の書いたものも、大部分は依頼原稿である。しかし、自分を書かざるをえない場所に追い込んだことも何度かある。たとえば、後で原稿依頼の来ることのわかっている研究会に出席するなどである。これは、私が自分に書かせるように罠を仕掛けたということで、私は決して「イノセント（無罪）」ではない

では、私が何も書かなかったら、どうなっていたであろうか。振り返ってみれば、あまりよいことになっていないのではないか。ひょっとすると独善的になるか、あるいは無内容になっていたと思う。（中略）書くことは明確化であり、単純化であり、表現衝動の「減圧」である。何よりもまず、書くことに耐えない多くの観念が消え去る。あるものは、その他愛なさによって、あるものは不整合によって、あるものは羞恥によって却下される。おそらく、夜中に大発見をしたと思い、朝にその下らなさにあき呆れるのと同じことである。

では症例報告を書くということはどうであろうか。私は、ほとんどまとまった症例報告を書いていない。それにはいろいろの理由がある。怠惰とかプライバシーの侵害ということを別にして、書こうとするとどうしても一回の面接の分だけで予定の枚数を超えてしまう。自分がどう感じたか、どう受け留めたか、あるいは受け留め損なったかなど、自分の側のことも書こうとするためかもしれない。しかし、これは困難なことで結局、比較的簡単な症例しか書けない。（中略）

そして、頭の中に萌芽状態の仮説や疑問などをとどめておくという、あの重苦しいことが、どうも治療には重要であるらしい。個々の患者についての「ああではなかろうかこうではなかろうか」「これはどうなっているのだろう」「これはこれからどうなるのだろう」などという、漠然とした仮説や疑問である。それから、経過や基礎的なデータの記憶がある。このプレッシャーが私の日々の臨床にとって必要であるらしい。症例報告を書いてしまうと、⑤この曖昧な雲のようなものが、明確にしすぎたものを若干残して消えてしまうらしい。症例報告を書いた後の治療は、ぎくしゃくするか、気が抜けたものになるか、いずれにせよ、少なくともしばらくはうまく行かない。

（中略）

むろん、この雲は二十四時間中、私の頭の中に漂っているわけではない。それでは日常生活に差し支える。診察が終わると、患者の顔を見てもすぐには出てこない形になるらしい。だから「さあ今日の外来は終わった」ということになってから飛び込んでくる患者は形どおりの診察、あるいはだらけた診察になりやすい。また、この雲ができるまでには何度か面接の回を重ねる必要があるようで、それができていない――ということは「患者の構造がつかめていない」と一般に言われることだが――うちは、名前と顔とが結びつかない。つまり、カルテを見て顔が浮かばないのは、この雲ができていない証拠である。中には雲がなかなかできない場合がある。これは、相性がよくないか、私には苦手の種類の病気かである。

この辺は、私の経験では詩の翻訳と似ている。今手がけている詩には「こう訳したらどうだろう」「これはどういう意味だろう」「こういうイメージでいいのだろうか」などという雲がまつわりついている。出版されてしばらくたつと、雲が消えてしまう。そして、雲のあるうちよりもずっと平凡な出来に見えてくる。これが実際の平均的読者に与える読みなのであろう。例外的に親近性のある読者だけが、雲に似たものを再現してくれるのだろう。散文の翻訳でも多少はこれはある。しかし逆に、この「雲」のできない翻訳というものは、⑥まったくの賃仕事である。

（中略）

結局、私のような（中略）精神科医にとっては、エッセイやアフォリズムしかありえないのかもしれない。私の書いたものは、分解してみれば、すべてこの二つのジャンルにはいるのではないかと思うことがある。そして、オクノフィルらしく、私の書いたものには大体ひそかな宛名があって、ほとんどすべて精神科医同僚であるが例外もある。いずれにしても、その人にはわかってほしいという「（　Ｙ　）」がある。

（中井久夫『精神科医がものを書くとき』による）

（注）

○マラルメ＝ステファン・マラルメ。フランスの詩人。難解な作風で知られる。一八四二～一八九八。

○ヴァレリー＝ポール・ヴァレリー。フランスの詩人、評論家。一八七一～一九四五。

○オサムシ＝世界じゅうに分布する昆虫。ゴミムシと呼ばれることもある。

○バリント＝マイケル・バリント。ハンガリー出身の精神科医・精神分析家。後にイギリスで活躍した。一八九六～一九七〇。

○フェレンツィ＝シャーンドル・フェレンツィ。ハンガリーの精神科医・精神分析家。一八七三～一九三三。

○精神分析＝神経症などの精神疾患を治療するために、ジークムント・フロイトが作り出した理論と技法。無意識や発達に関する固有の理論体系を有する。

○対象関係論＝乳幼児期における母との関係（対象関係）を重視する精神分析の一派。発達論的対象関係論は、対象関係論の立場から発達を論じるもの。

○膚接＝肌が接すること、また空間的・時間的に接すること。

○土居健郎＝日本の精神科医・精神分析家。日本社会の人間関係を「甘え」の構造として捉えた。一九二〇～二〇〇九。

○アフォリズム＝日常に関わる観察や思考を鋭くまとめた文章。箴言、警句、金言。

問一　傍線部①「一種の正当化」とありますが、その説明として最も適当なものを一つ選びなさい。

① 本当は図鑑を見ながら魚や植物などを味わうことに関心を抱いているにもかかわらず、洋書を見せつけることで、自分の欲望を隠そうとしているということ。

② 本当は世界の多様性に魅せられているだけにもかかわらず、カビへの興味を強調することで、自分の関心は社会の役に立つものだと強弁しているということ。

③ 本当は学問に対してまったく興味がないにもかかわらず、カビへの関心が洋書の研究を踏まえた学問的な関心であるかのようにみせかけているということ。

④ 本当は自らの興味にしたがって個物を探求しているにもかかわらず、自分の関心が学問的重要性のみに基づくものであるかのように取り繕っているということ。

問二　傍線部②「フィロバティズム」、傍線部③「フィロバット」とありますが、それぞれを説明したものとして最も適当なものを一つ選びなさい。

① フィロバティズムとは具体的な対象が近くにあることに恐怖を感じる状態であり、フィロバットとは具体的なものへの恐怖を好んで味わおうとする「スリルの人」のことである。

② フィロバティズムとは原初的な甘えを拒否した状態であり、フィロバットとは曲芸のような身体運動は苦手だが、数学のような抽象的・論理的な思考が得意な人のことである。

③ フィロバティズムとは個別の対象に関心がない状態であり、フィロバットとは困難な状況に身を置き、自らのスキルを試すことで非日常を味わおうとする人のことである。

④ フィロバティズムとは「調和的渾然体」に固執した状態であり、フィロバットとは世界を抽象的に捉えるとともに、常に不安定な状況に身を置こうとする人のことである

問三　空欄A～Dを補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

① A　オクノフィル　B　フィロバット
　C　私の背後　D　私の前

② A　金星人気質　B　地球人気質
　C　私の目の前　D　大地の上

③ A　フィロバット　B　オクノフィル
　C　私の前　D　私の背後

④ A　火星人気質　B　金星人気質
　C　大地の上　D　私の目の前

■空欄補充の解き方

①前後の文脈と矛盾がないように

②文の抽象度を意識する

③筆者の言語のクセに合わせる

問四　傍線部④「（一）何も書かないか、（二）症例報告を書くか、（三）エッセイかアフォリズムを書くか」とありますが、書くことのそれぞれのあり方に対する筆者の態度や考えの説明として、明らかに**ふさわしくないもの**を一つ選びなさい。

① 依頼を断り切れなかったり衝動に負けたりするなど、「弱さ」ゆえに書くという考えに理解を示しており、実際に書かざるをえない環境に自分を追いこむこともある。

② 何も書かないことへの憧れがあるが、自らの内に表現衝動を感じており、何も書かなければ自分の思いつきを反省する機会が持てず、独りよがりになると考えている。

③ 症例報告を書こうとすると、患者のことだけでなく、自分の感情や様々な疑問まで書こうとしてしまい、納得のいく報告はなかなか書けないと考えている。

④ エッセイやアフォリズムが得意であると自認しており、理論的・抽象的な論考に魅力を感じるが、自分の才能を発揮できないため、得意な分野に専念しようとしている。

■不適切な選択肢を選ぶ時の注意点

本文に書いていない　→　許容する

＝　明らかに不適切なものを選ぶ

問五　空欄（　X　）と（　Y　）を補うのに最も適当な組み合わせを一つ選びなさい。

①　X　強かさ　　Y　親しみ
②　X　恰好のよさ　Y　甘え
③　X　諦めのよさ　Y　強かさ
④　X　甘え　　Y　我儘

■空欄補充の解き方

①前後の文脈と矛盾がないように
②文の抽象度を意識する
③筆者の言語のクセに合わせる

問六　傍線部⑤「この曖昧な雲のようなもの」とありますが、それは筆者の医師としての仕事にどのように関わっていますか。最も適当なものを一つ選びなさい。

① 「雲のようなもの」とは、頭の中にとどめおかれた萌芽状態の仮説や疑問などによるプレッシャーであり、これを解消しないと治療はぎくしゃくしてうまくいかない。

② 「雲のようなもの」とは、個々の患者について医師が抱く疑問やイメージであり、治療の期間中は日常生活においてもつきまとって離れないプレッシャーとなる。

③ 「雲のようなもの」とは、医師と患者が共有する疑問などのもやもやであり、精神医学の理論体系によって整理されるならば、治療を可能とする前提となる。

④ 「雲のようなもの」とは、面接を重ねるなかで生じてくる漠然とした仮説や疑問であり、理論的な体系には還元できないものの、治療の指針のような役割を果たす。

問七　傍線部⑥「まったくの賃仕事である」とありますが、その説明として最も適当なものを一つ選びなさい。

① 筆者は、漠然とした疑問や不定形なイメージを通して原文を味わいながら翻訳しており、「雲」が生じない翻訳にはやりがいや面白みを感じないということ。

② 筆者は、翻訳の際に抱く様々な疑問や仮説が翻訳の質を向上させると考えており、「雲」が生じない翻訳は結果として平凡な出来にしかならないということ。

③ 筆者は、自らと同じ疑問やイメージを読者が抱くことに価値を見出しており、読者の想像力を刺激しないような翻訳には価値が見出せないということ。

④ 筆者は、翻訳の際に抱く疑問や仮説を強いプレッシャーとして感じており、「雲」が生じない翻訳は気楽に賃金を稼ぐことのできる仕事だということ。

問八　この文章の内容に合致するものを一つ選びなさい。

① 世界を単純な公式で示そうとする学問は世界の多様性に喜びを見出す学問と対極にあるが、後者の方が広がりのある思考を展開できるという点で生産的である。

② オクノフィルとは、具体的なものへの近さによって安全の保障を得ようとする人であり、個物を介して「調和的渾然体」に回帰しようとする点で「甘えの人」である。

③ 抽象的な思考や言明は、日常的な世界を超えて展開されるとき、非日常性がもたらすスリルの追及と強く結びつき、有用性を欠いた無意味なものとなってしまう。

④ 精神科医は、現場や患者とつかず離れずの関係を維持する必要があり、そのため抽象的な文章や症例報告よりも、エッセイやアフォリズムを好んで書く傾向がある

【解答】

〔一〕

問一　㋐＝②　㋑＝③　㋒＝③　㋓＝②

問二　④

問三　③

問四　④

問五　①

問六　②

問七　③

問八　④

問九　②

〔二〕

問一　④

問二　③

問三　③

問四　④

問五　②

問六　④

問七　①

問八　②

龍谷大学合格に向けて

【1】”知識“を身につける

【2】”文の読み方“を理解する

【3】”問題演習“に取り組む

←

高校の教科書

基本レベルの読解問題集

大学の過去問